

Title	「ハイピアリアン」と「ハイピアリアンの没落」の同一性と差異性：(2)共通の詩行について その2
Author(s)	安藤, 幸江
Citation	Osaka Literary Review. 13 P.49-P.60
Issue Date	1974-11-25
Text Version	publisher
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/25701">https://doi.org/10.18910/25701</a>
DOI	10.18910/25701
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 「ハイピアリアン」と「ハイピアリアン の没落」の同一性と差異性

—(2)共通の詩行について—その2

安 藤 幸 江

## はじめに

本誌12号の拙論、共通の詩行について—その1の後をうけて、「ハイピアリアン」第一巻、72—94行と「没落」第一巻、372—411行とを比較検討します。便宜上、二つに分けます。

### 1

「ハイピアリアン」第一巻、72—82行と「没落」第一巻、372—387行。

「ハイピアリアン」第一巻、72—82行は「没落」の第一巻、372—381行に相当します。それぞれ引用してみましょ。う。

- As when, upon a tranced summer-night, 72  
Those green-rob'd senators of mighty woods,  
Tall oaks, branch-charmed by the earnest stars,  
Dream, and so dream all night without a stir, 75  
Save from one gradual solitary gust —  
Which comes upon the silence, and dies off,
- As if the ebbing air had but one wave;  
So came these words and went; the while in tears  
She touch'd her fair large forehead to the ground, 80  
Just where her fallen hair might be outspread

「ハイピアリアン」と「ハイピアリアンの没落」の同一性と差異性

- A soft and silken mat for Saturn's feet.  
(*Hyperion*, Book I, 11. 72—82)
- As when, upon a tranced summer-night, 372  
Forests, branch-charmed by the earnest stars,  
Dream, and so dream all night, without a noise,  
Save from one gradual solitary gust, 375  
Swelling upon the silence; dying off;
- As if the ebbing air had but one wave;  
So came these words, and went; the while in tears  
She press'd her fair large forehead to the earth,  
Just where her fallen hair might spread in curls, 380
- A soft and silken mat for Saturn's feet.  
(*The Fall of Hyperion*, Canto I, 11. 372—381)

御覧の通り、「ハイピアリアン」72行と「没落」372行とは全く同じです。詩行の頭の小さい丸印がそれを示しています（この丸印及び下線は筆者による。以下の引用文においても同じ）。この行では“tranced”という語が印象的であり、以下数行の基調となっています。

ところが、次の行は異なっています。では相違点を検討してゆきましよう。まず、「ハイピアリアン」73行目から74行目にかけての“Those green-rob'd senators of mighty woods,/Tall oaks”の1行余は、「没落」では“Forests”の一語になっています。“These green-rob'd senators of mighty woods”と“Tall oaks”とは同格です。“oak”は御承知の通りイギリスおよびヨーロッパのよく知られた森の木です。この木をキーツは“senator”に譬えています。“senator”というのは、現在では、上院議員、古代ギリシャ、ローマ時代では、元老院議員ですが、*O.E.D.*では次のような意味が与えてあって、キーツのこの一行が引用してあります。

senator In vaguer sense: A counsellor, statesman;  
a leader in State or Church. Also *fig.* (*O. E. D.*)

即ち、国家、あるいは教会を指導したり、それに助言を与える年令、名望、地位共に高い人物でありましよう。緑豊かに茂り、大空に向かって、

すっと伸びている樹令の高い大木の樫の木には、まさにぴったりです。

「樹令の高い」と言いましたが、樫の木というのはイギリスで最も寿命の長い木の一つです。

The oak is one of the longest-lived of English trees. <sup>(1)</sup>

M.R. Ridley はその “Keats’ Craftsmanship” の中で、この「ハイピアリアン」72—73行について次のように言っています。

The first two lines were good enough to satisfy any one. <sup>(2)</sup>

ところが、このすぐれた詩行の73行が「没落」では削除されてしまい、簡単に “Forests” となっていました。惜しいことです。ただ、この森に樫の老木が生えていることは、403行目に “time-eaten oaks” とあるのでわかります。

“branch-charmed” から始まる次の二行は両詩共にほぼ同じです。ただ違うのは、行末 “without a” の後、「ハイピアリアン」では “stir” ですが、「没落」では “noise” であることです。この場合 “stir” というのは、“Slight or momentary movement” (O.E.D.) の意味です。“without a stir” というのは、「身動き一つせず」の意ですが、これは oak が senator に譬えられ、擬人化されているのをうけていると考えられます。ついでながら、キーツにはこの他に、“no stir of air” (*Hyperion*, Book I, l. 7) と “no stir of life” (*The Fall of Hyperion*, Canto I, l. 310) という表現があります。

一方、“noise” は次の意と思います。

A sound which is not remarkably loud.

1833 Tennyson *Lady of Shalott* IV, iii, Thro’ the

noises of the night She floated down to Camelot. (O. E. D.)

余り大きくない音、かそけき音です。キーツも次のように使っています。

A little noiseless noise among the leaves (*I stood tip-toe*, l. 11)

A rustling noise of leaves (*Endymion*. Book II, 496)

木の葉のそよぎのような、ささやかな音なのでしょう。“without a noise”

「ハイピアリアン」と「ハイピリアンの没落」の同一性と差異性

なのは、主語が“Forests”なので、木の葉のそよぎ一つなくの意です。

あたりの静けさを表わしているこれら二つの表現は、また語の音から受ける感じが違っています。〔stai〕は固く澄んでひきしまった感じなのに対して、〔noiz〕は柔い感じですが。

さて、ここでつけ加えておきたいのは、この

“branch-charmed by the earnest stars,  
Dream, and so dream all night without a stir”

という詩行が、初めからこんな風ではなかったということです。「一心にみつめる星たちによって、枝に魔法をかけられて、一晩中、身動きもせず、夢みる」というこのすぐれた詩の最初の形は次のようです。

The oaks stand charmed by the earnest stars  
And through all night without a stir they rest,<sup>(3)</sup>

この二つの詩を較べて、結果論的に言えば（なぜ結果論的にかと言うと、この形からすぐに今あるものになったのではなく、幾度かの訂正を経ているからです），“The”が“Tall”になって、大木である榎の木の、その高さが強められました。“stand”というのは木にとって当然すぎる表現ですし、特にこの場合、榎の木は“senator”に譬えられ擬人化されているので、“stand”ではRidleyの言うようにあまりに“colorless”<sup>(4)</sup>で、この詩行にふさわしくないと言えましょう。それが、“branch-charmed”と変えられた結果、72行目の“tranced”と呼応して、我々人間が手足に魔法をかけられるように、木々の手足ともいうべき枝に魔法をかけられたということ、より生き生きしたイメージを作り出しています。“stand”と“rest”という動詞を訂正して使われた“dream”は“tranced”“charmed”と見事に呼応し、colorfulで、前述の動詞などにはないイメージの広がりを与えています。更に、この印象の強い“dream”を繰り返すことによって、星の光を浴びて佇んでいる榎の木の姿が、いわゆる visual picture となって浮かんで来ます。

さて、ここに“Save from one gradual solitary gust”と一陣の風が吹くのですが、その表現は最後にコンマがあるかないかだけで両詩共に全く

同じです。これも最初は“Save from one sudden momentary gust”であったのが、こんな風に改められました。改めた方が音の感じからも意味の上からも良いと思います。突然パツと吹くのではなくて、次第に強くなり、ひとわたり木の間を吹く風、この方があたりの静けさに調和していますし、譬えられているモネータの言葉の調子にもふさわしいです。

次の行「ハイピアリオン」72行目の“which comes upon”と“dies off”が、「没落」376行目では“Swelling upon”と“dying off”になっています。意味は同じですが、片方は動詞の現在形を使い、もう一方は現在分詞の形を使っています。ここの情景は次行の“as if the ebbing air had but one wave”が示していますように、風が波のうねりのようにうねっているのです。この点から言えば、「没落」の方がその滑らかな音の流れからしてより優れているようです。そのアクセント、抑揚からも風のうねりが感得出来ます。

Swelling upon the silence; dying off;

(*The Fall of Hyperion*, Canto I, 376)

ひき続く“So came these words and went;”は、このようにモネータの言葉は聞こえ、そして消えていったというのですが、これも、コンマのある、なしの違いだけです。

次は、モネータが額を地面につけているところの描写ですが、「ハイピアリオン」では“touch'd”，「没落」では“press”です。普通、touchというのは、体の部分でも手とか足とかを触れさせるもので、額などにはあまり使わないものです。この点、“press”の方が一般的でしょう。“ground”と“earth”の相違はさほどないかと思います。

次行“Just where her fallen hair”では、「ハイピアリオン」の“might be outspread”という受身の表現はあまり適当でないように思います。しかし、「没落」で“might spread”としたのはよいですが、“in curls”としているのは、グロテスクな感じがしないではありません。最後の“a soft and silken mat for Saturn's feet”は両詩共に全く同じですが、その髪の毛のひろがりやをマットに譬えているのみなにか不似合です。

2

後半の部分引用しましょう。

- One moon, with alteration slow, had shed 83  
 Her silver seasons four upon the night,  
And still these two were postured motionless,  
 Like natural sculpture in cathedral cavern;  
 The frozen God still couchant on the earth,  
 And the sad Goddess weeping at his feet :  
 Until at length old Saturn lifted up  
 His faded eyes, and saw his kingdom gone, 90  
 ○ And all the gloom and sorrow of the place,  
 And that fair kneeling Goddess; and then spake,  
As with a palsied tongue, and while his beard  
Shook horrid with such aspen-malady:  
     (*Hyperion*, Book I, 83—94)  
Long, long, those two were postured motionless, 382  
 Like sculpture buildd up upon the grave  
Of their own power. A long awful time  
I look'd upon them; still they were the same; 385  
 The frozen God still bending to the Earth,  
 And the sad Goddess weeping at his feet .  
Moneta silent. Without stay or prop  
But my own weak mortality, I bore  
The load of this eternal quietude, 390  
The unchanging gloom, and the three fixed shapes  
Ponderous upon my senses a whole moon.  
For by my burning brain I measured sure  
 Her silver seasons shedded on the night  
And ever day by day methought I grew 395  
More gaunt and ghostly—Oftentimes I pray'd  
Intense, that Death would take me from the vale  
And all its burthens—Gasping with despair  
Of change, hour after hour I curs'd myself:  
 Until old Saturn rais'd his faded eyes, 400  
     ^

- And look'd around and saw his kingdom gone,  
 ○ And all the gloom and sorrow of the place,  
 And that fair kneeling Goddess at his feet.  
As the moist scent of flowers, and grass, and leaves  
Fills forest dells with a pervading air, 405  
Known to the woodland nostril, so the words  
 Of Saturn fill'd the mossy glooms around,  
 Even to the hollows of time-eaten oaks,  
And to the winding in the foxes' holes,  
With sad low tones, while thus he spake, and sent 410  
Strange musings to the solitary Pan.

(*The Fall of Hyperion*, Canto I, 382—411)

この部分での両詩の表現はかなり違ってきます。どちらも、サターンとモネータが一月の間身動きせずにいることを述べてはいるのですが、「ハイピアリアン」の方は純粋な物語であるので、その情景を客観的に表わしているのに対して、「没落」の方は、詩人がその情景に立ち合っているため、詩人の心情的体験も述べられています。まず「ハイピアリアン」83—85行で、

“One moon with alteration slow had shed  
 Her silver seasons four upon the night,  
 And still”

と二行余で歌われているところは、「没落」では“Long, long”の二語になっています。「ハイピアリアン」84行目で“silver seasons four”というのは月が、新月、上玄、下玄、満月と変り、一月経つことを示しています。「没落」では“Long, long”で、どの位の期間かは最初はわかりませんが、392行目で“a whole moon”と出てきますので、これも一月ということになります。また394行目には“her silver seasons”という表現が出てきます。ここで注意すべきことは、「ハイピアリアン」では“alteration slow”とか“silver seasons four”とか、名詞の後に形容詞の来る、いわゆるミルトンの倒置、“Miltonic inversion”が使われていることで、「没落」の方では、そういう倒置はなくなっています。「ハイピアリ



「ハイピリアン」と「ハイピリアンの没落」の同一性と差異性

アン」はミルトンの影響を受けているといわれていますが、これもそのあらわれの一つです。

上に続く “these two were postured motionless” は, “these” と “those” の違いだけで, 両詩共に同じで, この動かぬ姿を共に “sculpture” に譬えているのですが, その “sculpture” のそれぞれのイメージは違っています。

まず, 「ハイピリアン」では, “natural sculpture” で “cathedral cavern” の中にあるものです。この場合, “natural” というのは「自然にできた, 自然によって浸蝕されてできた」という意味です。この「ハイピリアン」36行目に M. Allott は次のような註を付けています。

Rocks so eroded by the sea that we recognize human features in their forms.  
(Miriam Allott, p. 401)

即ち, 海によって人間の形に浸蝕された岩のことです。ついでながら, 「ハイピリアン」第一巻, 4行目でサターンは “quiet as a stone” と石に譬えられています。そしてまた, この行の “cathedral cavern” というのは, セリンコートはじめ多くの学者が指摘しているように, キーツは “Fingal’s Cave” のことを考えていたと思われまゝ。このフィンガルの洞窟を彼は1818年7月のスコットランド旅行の時に訪れました。そしてそれにとっても感動し, “Not Aladdin magian” で始まる “On Visiting Staffa” と題する詩を書き, その中で, この洞窟を “This Cathedral of the Sea!” と呼んでいます。

On Visiting Staffa

Not Aladdin magain 1  
Ever such a work began;  
.....  
'I am Lycidas,' said he,  
'Fam'd in funeral minstrelsy!  
This was architected thus 25  
By the great Oceanus!—  
Here his mighty waters play  
Hollow organs all the day;

Here by turns his dolphins all,  
 Finny palmers great and small, 30  
 Come to pay devotion due—  
 Each a mouth of pearls must strew.  
 Many a mortal of these days,  
 Dares to pass our sacred ways,  
 Dares to touch audaciously  
 This Cathedral of the Sea! 36

そして、この詩を書き送った弟 Thomas Keats に対する 7月26日付の手紙で彼はこの詩行を暗示するような次の文章を書いています。

The finest thing is Fingal's Cave—it is entirely a hollowing out of Basalt Pillars. Suppose now the Giants who rebelled against Jove had taken a whole Mass of black Columns and bound them together like bunches of matches—and then with immense Axes had made a cavern in the body of these columns—of course the roof and the floor must be composed of the broken ends of these columns—such is Fingal's Cave except that the sea has done the work of excavation and is continually washing there.....For solemnity and grandeur it far surpasses the finest cathedral. (Letter to Thomas Keats, 26 July 1818)

以上のことより、「ハイピアリアン」の彫像は、海岸の洞窟の中、波によって浸蝕された人間の形をした岩のイメージです。

一方、「没落」では、“built up upon the grave/Of their own power” とあるように、墓の上に刻まれた彫像です。この場合の彫像は墓の下の埋められた人のありし日の姿をそのままに彫られたものです。これとよく似た表現は、ダンテの「神曲」の「煉獄編」の十二巻、16—18行にあります。キーツはケアリーの訳でそれを愛読していました。ケアリーの訳でこの部分を引用してみますと、

As, in memorial of the buried, drawn  
 Upon earth-level tombs, the sculptur'd form  
 Of what was once appears...<sup>(5)</sup>

「没落」はダンテの影響を受けているといわれていますが、この部分もその一例にあたります。

・「ハイピアリアン」と「ハイピアリアンの没落」の同一性と差異性

「没落」の次の一行半、384行目からの“A long awful time/I look'd upon them; still they were the same;”は「ハイピアリアン」にはありません。次の行、この動かないサターンを“frozen God”と言っている行では、「ハイピアリアン」の“couchant”が「没落」では“bending”とより自然になっています。普通“couchant”は獣などがうづくまるのに使われますが、ミルトンはセイタンについてこれを使っています。*Paradise Lost* 第五巻、405行目で“His couchant watch”と言っています。キーツはこの先例に従ったのでしょうか。キーツはミルトンのこの箇所印をつけています。

「没落」388—399行は「没落」独自のものです。ここでは、この動かない神々を前にして、その沈黙の重さにじっと耐えている弱い作者の姿が描かれています。390行目“The load of this eternal quietude”や、392行目“Ponderous upon my senses”などのユニークな表現によって、その感じがよく表われています。ただ394行目で“shedded”という形を使ったこと、393行目の“sure”及び397行目の“intense”といういわゆるミルトン的な adverbial adjective を使ったのが惜しまれます。また、396行目からの

Oftentimes I pray'd

Intense, that Death would take me from the vale

And all its burthens—Gaspng with despair

Of change, hour after hour I curs'd myself:

は、息もつまりそうになった様子がまざまざと描かれています。そしてこれらの表現により、神々の希望のない状態がより一層印象づけられています。

その次の四行程、「ハイピアリアン」では89行目から92行目までと「没落」400行から403行目までとは、サターンが目目をあげて、あたりの様子を見るところですが、両詩共、たいした相違はありません。“at length”の有無、“lifted up”と“raised”の違い、“And look around”の有無、“at his feet”の有無、にすぎません。

きて、いよいよ、サターンが話を始めるところですが、ここはもうまるっきり違ってきています。「ハイピアリアン」では“palsied tongue”と中風を病んだ者の舌のまわらぬ様子を表わしていますが、更に最後に“aspen malady”と付け加えています。ちなみに、ここでいう“aspen”とは、Miriam Allott が

The aspen shakes in the lightest breeze.

(Miriam Allott, p. 402)

と註をつけているように、少しの風にもよく震えるポプラの一種です。“aspen malady”というのは「震える病気」で中風のことです。そして、ここで“shook horrid”の“horrid”はまた adverbial adjective です。

一方、「没落」では、“as”以下三行で美しい simile が歌われます。サターンの声がすみずみまでしみわたるあたりの様子とは、“mossy glooms”であり、“time-eaten oaks”と、desolation の感じ です。そしてまた、“solitary Pan”は Golden Age の去った後の、自然の淋しさと荒廃を暗示しています。

## お わ り に

以上、両詩の共通の詩行の二番目の部分を比較検討し、その相違点を指摘してきましたが、おおよそ、次のようなことが言えると思います。第一に、「ハイピアリアン」では“Miltonic inversion”と呼ばれる倒置がよく使われていますが、「没落」ではそれらは避けられています。但し、形容詞を副詞に使う adverbial adjective は両詩共に見られます。第二に、「ハイピアリアン」では表現の仕方と荘重な調子にミルトンを思わせるものがあります。それに対して、「没落」では、その影響から離れ、ダンテの影響が見られると共に、キーツ独得の美しい表現が出てきます。

### 註

- (1) *The Poems of John Keats*, ed. by Miriam Allott (1st ed.; London: Longman, 1970), p. 401, notes.
- (2) M.R. Ridley, *Keats' Craftsmanship* (1st ed.; London: Methuen, 1963), p. 74.

- (3) *The Poems of John Keats*, ed. by E. De Selincourt (8th ed., London: Methuen 1961), p. 497, notes.
- (4) M. R. Ridley, p.74.
- (5) Dante Alighieri, *The Divine Comedy, Purgatorio* xii 16—18, Cary's version.  
テキストは次のものを使用しました。引用もここからです。  
H. W. Garrod (ed.), *The Poetical Works of John Keats* (2nd ed.; Oxford: the Clarendon Press, 1966)  
Robert Gittings (ed.), *Letters of John Keats* (1st ed.; London: Oxford University Press, 1970).